

芸術実践領域（実技系）

学位論文作成マニュアル

2022年度改訂版

東京藝術大学大学院音楽研究科

芸術実践領域（実技系）

学位論文作成マニュアル

2022年度改訂版

東京藝術大学大学院音楽研究科

イントロダクション

「論文を書くのは難しい」と言われるのを時折耳にします。たしかに、論文を書くことは容易いことではありません。でも、ちょっとしたコツを知っていれば、無駄な時間を費やさなくて済むようになります。論文を書くための負担感を少しでも軽減しようと作られたのが、このマニュアルです。

本マニュアルは、主に大学院音楽研究科の**音楽専攻（作曲、声楽、鍵盤楽器、弦・管・打楽器、室内楽、古楽、指揮、邦楽）の博士論文**を作成することを念頭に書かれていますが、実技系の専攻の修士論文や音楽文化学専攻の修士・博士論文を作成する際にも参考になる記述がいくつもあると思います。適宜、ニーズに合わせて活用してください。

全体は六つの章から構成されています。

1. 学位論文 FAQ
2. 研究テーマとアプローチの決め方
3. 資料の活用法
4. 論文の構成
5. 参考文献のまとめ方
6. 博士論文作成計画の立て方

最初から順番に読んでも、興味のあるところを拾い読みしてもいいようにできています。また、作業中の確認にも使えるよう、目次の見出しを細かくしています。

東京藝術大学では、平成 20～24 年度に芸術リサーチセンターを設置し、博士学位授与プロセスに関する研究を実施しました。このマニュアルは、その成果として作成された「芸術実践領域（実技系）博士プログラム」の補遺という位置づけです。本マニュアル活用の際には、「芸術実践領域（実技系）博士プログラム」や芸術リサーチセンターの最終成果報告書も合わせて参照してください。これらは冊子、及び本学ウェブ上で公開されています。

尚、本マニュアルの電子版は音楽総合研究センターのウェブサイトから入手できます。必要に応じてアップデートしていきますので、誤記はもとより、内容に関する意見や要望などありましたら、気軽に教務係までお知らせください。

目次

イントロダクション	1
1. 学位論文 FAQ	4
1. 「修士論文」と「博士論文」の違いは？	4
2. 「研究」って、何ですか？	4
3. 「実践に基づく研究」って、どういうものですか？	5
4. 「問い」は、どうやって立てるのですか？	5
5. いつ「問い」を立てたらいいのですか？	6
6. どんな研究アプローチがあるのですか？	7
7. 学位論文は分厚くないといけないのですか？	8
8. 音声・映像メディアを用いてもいいのですか？	8
9. 博士論文は誰に向けて書くのですか？	8
10. 博士論文って何のために書くのですか？	8
2. 研究テーマとアプローチの決め方	9
1. 研究テーマのしぼり方	10
2. アプローチのタイプ	11
3. 資料の活用法	13
1. 研究資料を見分ける	13
2. 一次資料と二次資料	14
3. 学術的な信頼性	15
4. 必要とする研究資料にどうたどり着くか	16
1) 音楽事典を活用する	16
2) データベースを活用する	16
3) 文献は芋づる式に見つかる。だが……	17
5. 資料に関する情報を整理する	17
4. 論文の構成	18
1. 論文の形式	18
1) 要旨	18
2) 扉	18

3) 論文冒頭部分	18
4) 論文本体	19
5) 論文巻末部分	19
2. 文章の構成	20
1) 論文全体の結論は？	20
2) 章立ての決め方	20
3) 各段落の構成	21
4) 論理的な文章を書くための注意	21
5. 参考文献のまとめ方	22
1. 資料を分類する	22
2. 資料を順序よく並べる	22
3. 資料の情報を的確に記述する	23
6. 博士論文作成計画の立て方	24
1. 計画を立てるまえに	24
2. 論文提出までの流れ	24
3. 論文作成計画の例	26
4. 上手な計画の立て方	28
5. なぜ時間がかかるのか	28
【付録】学位論文提出前の作業チェック表	30

1. 学位論文 FAQ

まずは芸術実践領域（実技系）の学位論文がどのようなものか、FAQ（よくある質問）形式で理解しましょう。

1. 「修士論文」と「博士論文」の違いは？

修士論文も博士論文も、学位論文（正確には「学位請求論文」と呼ばれるもので、修士号や博士号という学位を取得するために提出し、審査を受ける論文のことです。どちらも、それぞれの課程における研究成果を「論文」という形にまとめるものなので、内容に関する大きな違いはありません。

しかし、修士論文と博士論文では、次の点において違いがあるとされます。

規模 …… 博士研究の方が、修士研究よりも時間をかけて、より本格的におこなわれるため、論文の構成や長さも、より大規模なものになる。

深さ …… 博士研究の方が、より専門的な内容を深く探究することが求められ、論文の記述もより精緻なものが要求される。

オリジナリティ …… 博士論文では、独自の研究成果が重視されるが、修士論文では、先人の研究成果をまとめたり、批判的に分析したりする比重が大きくてもよい。

このように、修士論文と博士論文は、規模、深さ、オリジナリティにおいて差がある（はずだ）と一般に考えられています。

また、**提出方法や審査の手続きに、さまざまな違いがあります。**博士論文の方が、修士論文に比べてはるかに煩雑で、文部科学省の省令でも細かく規定されています。修士論文のように、論文を提出して終わりというわけにはいかないの、よく注意してください。一方、修士論文の規定は、専攻ごとに異なっているので、各自で確認するようにしてください。

2. 「研究」って、何ですか？

「勉強」や「調査」との違いから考えてみましょう。

勉強 …… 既にあるもの（体系化されたもの）を学ぶこと、習得すること

調査 …… 何かを明らかにするために、必要なデータ（資料となるもの）を集めること
研究 …… 未だ明らかにされていないことについて問いを立て、その答えを明らかにすること

つまり、「研究」では、答えを出すことと同時に（しばしば「答え」そのものよりも）、「問い」をうまく立てることが大切です。研究の目的は、何かを「証明」することではありません。まだよく理解されていない、けれど解決する必要のある問題を見つけだし、それを他人に知らせることができる形で明らかにする、ということが重要です。

とくに芸術実践領域（実技系）の場合は、作曲や演奏等を実践する過程で遭遇したことに對して「問い」を立て、それに対する「答え」を、実践での試行錯誤も含めて追究することが「研究」となります。それなので、知的な興味とともに、技術や表現力などを高めるために、自分にとってもっとも重要な「問い」は何かを考えることが大切です。

3. 「実践に基づく研究」って、どういうものですか？

しばしば「演奏家（作曲家）らしい論文を書きなさい」と言うのを耳にします。でも、それは音楽的営みをそのまま言葉に置き換えることを意味するものではありません。作曲や演奏の内容を文学的な言葉で表現するのではなく、音楽作りのプロセスの一部を探究することが研究です。

近年、国際的に広まっている「実践に基づく研究」（practice-based research）というのは、自分のこれまでの芸術的実践を俯瞰的に振り返り、そのエッセンスの一部を分析的に説明することや、芸術の実践過程で遭遇した問題に向き合い、それを解決するプロセスを記録にとどめることを指します。つまり、芸術実践を通じて、あるいはきっかけとして得た知見を他者と共有可能なものにする営みです。「音楽の研究」というよりも、「音楽作りのプロセスに関する研究」と考えた方がよいかもしれません。

4. 「問い」は、どうやって立てるのですか？

時折、学問研究には、「純学問」と「実践研究」の二つのタイプがあると言われます。

純学問 …… すでに体系化された学問分野において、新たな知見を加えること。まずはその学問体系をマスターし、未踏の部分を見つけ、その部分を調査研究する。

（例：歴史資料研究、哲学、理論物理学など）

実践研究 …… 実際に何かをしている中で問題に感じた「解決すべき課題」を設定し、それに対する答えを追究すること。（例：防災学、臨床哲学、工学）

従来の音楽学の研究は、前者の「純学問」ということができます。一方、芸術実践領域（実技系）

1. 学位論文 FAQ

の研究は、主に後者の「実践研究」に属します。

ただし、ここで「純学問」と「実践研究」と呼んでいるものは理念型で、ほとんどの研究はこれらの中間に位置します。音楽学の研究でも（とくに最近のものは）実践的側面をもっているものは多くありますし、芸術実践領域（実技系）の「実践研究」でも先行研究の内容を押さえるのは必須です。また、「問い」を探究する方法（アプローチの仕方）についても明らかにし、「答え」へと導くプロセスを明示する必要があります。

5. いつ「問い」を立てたらいいのですか？

芸術実践の中で遭遇した問題に対して、「問い」を設定して取り組み始めてみたものの、適切な「答え」が見つけれそうにない、ということはよくあります。たとえば、次のようなケースが考えられます。

- 「問い」が大きすぎて、期限内に解決不能なことがわかった。
- 作業の途中で、すでに誰かが答えを出していることが判明した。
- 作業の途中で、当初立てた「問い」よりも興味をもつことができ、それにつられて作業が逸れていった。

このような場合は、研究の途中でも、自分の出した「答え」（もしくは、出せそうな「答え」）に合わせて、「問い」を立て直す必要があります。最初の「問い」に固執して、「答え」が見いだせなくなるよりも、**次善の「問い」**を設定し、それに見合った「答え」を見つけることの方が大切です。

前にも触れたように「研究」は「勉強」と違い、あらかじめ「答え」がわかっています。ですから、**一貫性のある「問い」と「答え」の関係を見つけ出すことこそが**、研究の意義と言えるかもしれません。

実際、研究を開始する際の素朴な「問い」と、論文を執筆する際に読者に伝える「問い」も、むしろ別なものと考えた方がよいでしょう。

研究開始時の自らの「問い」……「解決すべき課題」として、研究に着手する際に立てる
素朴な疑問

論文中での読者に伝える「問い」……論文を執筆する際に、最初に述べる研究設問

論文では、「問い」と「答え」が一貫していることが求められます。そうでないと人は納得しないからです。論文の最初に書かれる「問い」（問題提起）は、「答え」から導き出された**後付けの「問い」**であっても問題はありません。

6. どんな研究アプローチがあるのですか？

研究には、さまざまなアプローチの仕方があります。博士論文の場合は、通常、以下の複数が組み合わされて用いられます。どんな論文でも①は先行研究レビューとして必須です。芸術実践領域の研究では、とくに②や③が重要になります。⑤や⑥も②と組み合わせて用いられることがあります。

①文献研究 … 先行研究を吟味し、新しい視点や解釈を見つける。論文の最初に置かれる先行研究レビューは、これの一種。芸術実践領域の研究では、先行事例の検証ということも考えられる。

②オートエスノグラフィー … 次の参与観察に似ているが、対象は自分自身で、たとえば自分の芸術実践の過程を記録・省察するなど。

③参与観察研究 … ある現場に出かけ、その集団に加わり、そこで行われていることを観察記録し、分析をおこなう。集団による作品制作に加わり、制作の過程を参与観察する、あるいは、アンサンブルに加わり、リハーサルを参与観察するなど。

④事例研究（ケーススタディ） … 一つ（複数）の事例を選び、その事例を調査する。従来になくユニークな教育やイベント、あるいはコンサートの一部始終を観察者として観察し、効果や問題点などを指摘する。

⑤歴史的・分析的研究 … 資料やデータを収集分析し、未知の実態を明らかにする。過去の作品の成立や受容の背景を明らかにする。作品の分析から特質を抽出する。過去の作品や演奏について録音・録画に基づき詳細に分析する。

⑥仮説検証研究 … 最初に仮説を設定し、それが正しいか調査・実験する。ある材料や構造が作品に用いられていることを、調査分析を通じて立証する。ある表現を達成するために、どのような技法を用いるとよいか検証実験をする。

どのアプローチを用いるかは、研究のテーマや目的によって決まります。ただし、いずれの場合でも、どのような方法を用いて研究をおこなうかは、論文の中で明確に記述する必要があります（方法論の明確化）。

7. 学位論文は分厚くないといけないのですか？

修士論文も博士論文も、重要なのは長さではありません。いくら量が多くても、すでにどこかに書かれていることばかりでは意味がありません。とくに実践研究の場合は、**分量は問題ではありません**。いかに適切な問いを立て、それに答えを導き出すことができるかが勝負です。量より質を目指してください。

8. 音声・映像メディアを用いてもいいですか？

本文の内容を補足するものとして、DVD などのメディアを添付することは可能です。ただし、助演者がいる場合には許可をとり、著作権の所在を明確にすることが必要です。楽譜などのコピーも必要に応じて添付することはできますが、研究成果公開の際には、著作権の問題が発生することがあるので留意してください。

9. 博士論文は誰に向けて書くのですか？

博士論文は、難しいことを難しく書くものではありません。まだ知られていないことを明らかにし、それを**わかりやすく書く**ことが重要です。完成後に論文を読むのは、そのテーマに精通している専門家ばかりではないことを意識し、丁寧に説明することを心がけてください。完成した論文は、国会図書館と大学の附属図書館に収められます。また、今後はウェブサイトでも公開されるようになります。

10. 博士論文って何のために書くのですか？

博士論文は、当該領域の芸術実践における新しい知見を他人と共有可能にし、芸術創造のさらなる進化や深化を遂げるための土壌作りをすることに貢献するものです。新たな「知」を生み出すことで人間の生をより豊かにし、社会に貢献するものといっても過言ではありません。

しかし、博士論文は、**自伝的意味**を持つものでもあります。これまで培ってきた芸術実践をある切り口からまとめあげることで、過去の自分自身の表現創造活動を見つめなおし、次のステップへと進む足がかりになるものと考えて、取り組むとよいでしょう。

参考文献

小田博志『エスノグラフィー入門』東京：春秋社、2010年。

佐藤郁哉『フィールドワークの技法』東京：新曜社、2002年。

妹尾堅一郎『研究計画書の考え方』東京：ダイヤモンド社、1999年。

2. 研究テーマとアプローチの決め方

研究内容が漠然としたアイディアに留まっていて、研究テーマやアプローチが未だ決まっていないとき、どのようにして研究の形を作っていくのがよいでしょうか。

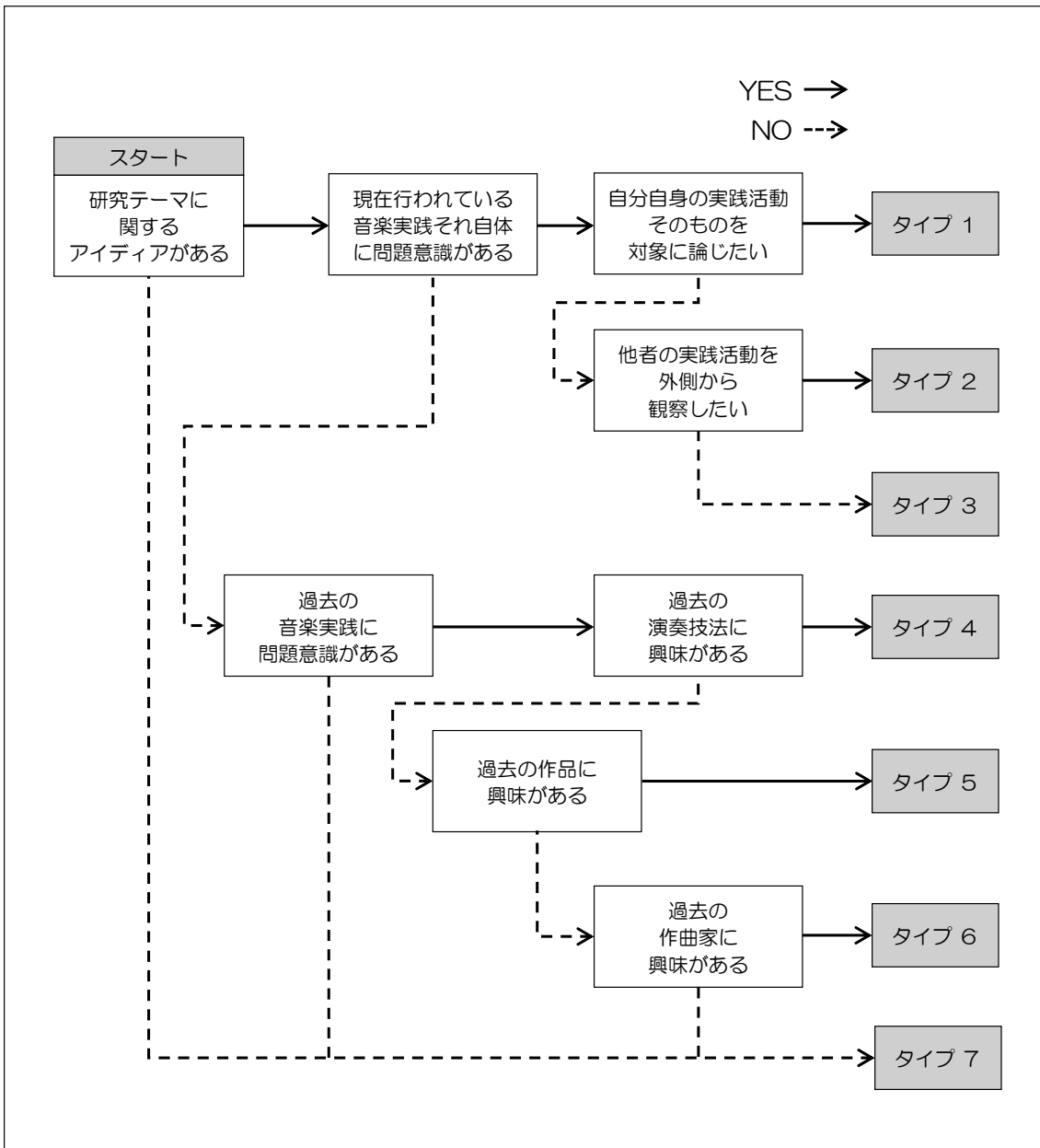
研究テーマやアプローチは、自分から離れたところに突如として現れる（思いつく）ものではなく、自分自身の周辺にある事柄のなかから生まれるものです。そのため、研究テーマやアプローチの構想を練るときには、自分自身がこれまで関心を抱いてきた事象や印象的な音楽体験などを振り返ってみることが肝要です。この段階で、まずは自分の中にあるイメージにしたがって、論文の仮題目を設定することをお勧めします。そして、関連の事例について調べたり、周辺事項を調べたり、文献リストをつくって過去の研究（先行研究）を精査したりすると、自分の研究したい内容の輪郭が次第に捉えられるようになるでしょう。研究内容の輪郭が見えてきたら、研究テーマと研究対象を策定し、そのアプローチを決めていくことになります。

ここでは、フローチャートを用いて、研究テーマやアプローチをしぼる道筋を具体的にイメージしましょう。

2. 研究テーマとアプローチの決め方

1. 研究テーマのしぼり方

研究テーマをしぼる道筋は、自分の抱く問題意識について自問自答する過程でもあります。フローチャートの質問に答えて進んでください。あなたはどのような道を進んでしょうか。ではスタート！



2. アプローチのタイプ

研究テーマをしぼっていくことで、自分のアプローチのタイプが見えてくると同時に、研究内容についてもずいぶん明確になったと思います。

このフローチャートでは、アプローチのタイプを仮に七通りに分類しました。各タイプの詳細は下記の通りです。とくに研究内容の例を参考にして、自分自身のアプローチをさらに検討してみましよう。

なお、ここに挙げたタイプには収まらず、たとえば複数のタイプにまたがる研究内容や、ここにはない新しいタイプの研究内容などもあることをお断りしておきます。

タイプ	型	研究内容の例
タイプ1	オートエスノグラフィ	現在の音楽実践のなかでも、自らの行っている実践活動そのものについて論じたいあなたは、自分の音楽実践の過程を記録・省察するとよいでしょう。 例えば、演奏時における身体の使い方を分析する研究や、発声法を分析する研究などがあります。
タイプ2	事例研究	現在の音楽実践のなかでも、他者の活動を完全なる観察者として論じたいあなたは、ある音楽実践の場を訪れ、そこで行われていることを傍観的立場から観察・記録・分析するとよいでしょう。 例えば、コンサートやレッスンなどを観察し、効果や問題点を論じる研究があります。
タイプ3	参与観察研究	現在の音楽実践のなかでも、他者の活動を直接的に把握したいあなたは、他者の活動に参加し、現場でおこっていることを、活動の当事者の視点をふまえて記録・分析するとよいでしょう。 例えば、アンサンブルに加わって、リハーサルの様子を参与観察・記録・分析する研究があります。
タイプ4	歴史的・演奏研究	過去の音楽実践のなかでも、とりわけ演奏技法に興味のあるあなたは、過去の演奏に関する未知の実態を楽譜史料や録音・録画資料などを分析して明らかにするとよいでしょう。

2. 研究テーマとアプローチの決め方

<p>タイプ5</p>	<p>歴史的・研究・ 楽曲研究</p>	<p>過去の音楽実践のなかでも、とりわけ過去に成立した作品に興味のあるあなたは、歴史史料を収集・解読したり、作品を分析したりして、当該の作品に関する未知の実態を解明するとよいでしょう。</p> <p>例えば、作品の成立過程や受容の背景を明らかにする研究や、作品の解釈や音楽的特質について論じる研究などがあります。</p>
<p>タイプ6</p>	<p>歴史的・研究・ 作曲家研究</p>	<p>過去の音楽実践のなかでも、とりわけ過去の作曲家に興味のあるあなたは、歴史史料を収集・解読して作曲家に関する未知の実態を解明するとよいでしょう。</p> <p>例えば、作曲家の生い立ちや活動実態を明らかにする研究などがあります。</p>
<p>タイプ7</p>	<p>研究テーマに関するアイデアがない…</p>	<p>研究テーマに関するアイデアのないあなたには、下記をすることをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> 👉 これまでの音楽経験で強く印象に残っていることや、疑問に感じたことを思い出してみよう。 👉 自分が現在の演奏スタイルを確立した経緯を振り返ってみよう。 👉 自分のなかで特定の作品に対する音楽観が芽生えた過程を思い起こしてみよう。 👉 自分の教育体験を振り返ってみよう。 👉 頭のなかで考えていることを具体的なメモにおこしたり、人に聞いてもらったりしよう。 👉 キーワードと思われる言葉を書き出してみよう。

3. 資料の活用法

論文を執筆する際には、研究テーマに関して、これまでどのような研究が行われてきたのか（研究状況）を把握し、そうした過去の研究（先行研究）をふまえ、また先行研究を必要に応じて参照しなければなりません。自分がいかに独創的なテーマだと考えていたとしても、すでに同じようなテーマで研究をしている者がいるかもしれませんし、また、自らの研究の正当性や独自性を、説得力をもって示すためにも、過去の研究の蓄積をふまえ、それに批判的な検討を行っておくことは、論文を執筆する上で欠くことの出来ない、最初の、そして最も重要なステップなのです。そこで、以下では、研究資料にアクセスして、それを活用するための基本的な方法についてまとめておきたいと思います。

1. 研究資料を見分ける

まず、音楽研究が他の研究領域と比べて特殊な点は、研究資料が多岐にわたるということです。「文献」と呼ばれる研究書や学術論文などに加えて、楽譜、録音資料、映像資料も、音楽研究においては重要な研究資料となります。また、出版されたものだけでなく、インターネット上にもさまざまな資料が存在します。ここでは、とくに論文執筆の際に最も重要な研究資料となる「文献」について整理しておきたいと思います。

音楽研究で用いられる文献には、大別すると以下のようなものがあります。

表

参考図書	事典（総合事典、主題別事典）、目録（作品目録・文献目録）
単行本	研究書、概説書、解説書、啓蒙書
論文	学術論文（学会誌、紀要、論文集）、学位論文
その他	雑誌・新聞記事、CD解説、曲目解説

論文を執筆するためには、**文献をそれぞれの性格にあわせて活用していくことが必要**となります。研究を展開するには、研究対象に関する基礎的な知識を欠くことはできませんし、一方で、最新の学説を知っておくことも重要です。例えば、事典類からは、研究対象に関する基礎的な知識を包括的かつ体系的に得ることができます。しかし、そこから研究対象に対する最新の研究内容を知ることはできません。なぜなら、**事典は対象に関する一般的な共通認識を論述するもの**だからです。ただし、そうした事典類を活用する際にも、できるかぎり最新のものを参照すべきで

3. 資料の活用法

す。かつて事典に載せられ、一般に信じられてきた学説が最新の研究によって覆されたり、修正されたりすることがあるからです。

学術論文は、著者自身による特殊かつ最新の学説が展開されるものです。しかし、最新の内容であるがゆえに、その評価がまだ定まっていない可能性もあります。また、論文の内容については、既存の学説をふまえた上で、それに新たな知見を加えたり、それを反証したりするものなので、学術論文をきちんと読みこなすには、研究分野に関する一般的な知識が欠かせません。**研究書は、著者がさまざまな媒体に発表した長年の研究成果を書物にまとめたものが多いでしょう。**したがって、記述されている内容も、学術論文に比べれば、ある程度、評価が定まったものと考えてもいいですが、これもまた、事典とは違って、研究対象に関する一般的な共通認識というよりも、著者の独自の見解であることに注意すべきでしょう。

こうしたさまざまな文献を通して、研究対象に関する先行研究を整理し、その中身を批判的に検討していく作業を、**文献研究**と言います。先にも述べたように、自らの研究を進めていくにあたって、これまでの研究状況を把握し、自らの研究がその中でどのような位置づけにあるのかを明確にすることは、欠くことのできないステップです。その際、研究対象となる分野にすでに精通しているならば、いきなり研究書や学術論文に取り組むのもいいでしょう。しかし、自分がよく知っているつもりでも、基本的な知識が抜け落ちているということもありがちです。したがって、代表的な参考図書には必ず目を通し、研究対象に関する「常識」を押さえた上で、より専門性、特殊性の高い内容に進んでいくのが、文献研究を進める手順としては順当であると言えます。

2. 一次資料と二次資料

学術研究の基本は、ひとつの事柄に対し、**できるかぎりオリジナルの情報を参照するという態度**です。この考え方に即し、研究資料は、一般的に一次資料／二次資料のふたつの種類に分けることができます。

一次資料とは、第三者による加工や編集を経していない「オリジナル」な研究資料のことを指します。例えば、楽譜であれば、自筆譜や筆写譜、写本や初版譜のような原典資料、またそれらのファクシミリ版（現物を複写印刷したもの）などがそれに該当します。また、音楽それ自体ではなく、作曲家やその周辺の人々の言説を研究する場合には、対象となる時代・地域の新聞や雑誌、また書簡や日記のような、作者本人の言説にさかのぼるような資料も、一次的な資料として取り扱うことができます。さらに、フィールドワークを行ったり、自らの、あるいは他者の演奏を研究対象としたりする場合には、録音・録画、測定データ、現場において自らが記録したノートやメモ類も重要な一次資料となります。また、社会学的な関心に基づく研究では、統計資料のようなものも一次資料として用いることができます。

対して、**二次資料とは、オリジナルの資料などから得られた研究内容を含む文献全般のことを指します。**一般的には、研究書や学術論文などがこれに該当します。また、そうした文献に加えて、オリジナルの資料に基づくものの、第三者による加工や編集が加えられたものも、二次資料

となるので注意が必要です。例えば、楽譜でも批判校訂版（いわゆる「原典版」と呼ばれているもの）は、校訂者によるオリジナル資料の研究にもとづいて作成された楽譜なので、二次資料となります。

研究はできるかぎり一次資料にもとづいて行うのが基本です。しかし、全ての研究が一次資料に基づいて行われるべきであるというわけではありません。例えば、作品研究を行う場合、研究の主眼が楽曲分析や作品解釈にあるときには、自筆譜にまでさかのぼって研究を行う必要はありません。こうした場合は、信頼のおける批判校訂版を用いるので十分な場合がほとんどです。また、対象となる資料が遠隔地にあたり、貴重なために公開されていないなどの理由で実物を見ることができない場合もあるでしょう（ただし、近年は、国内外の図書館や博物館のウェブサイトで、一次資料の画像データの公開が進んでいるので、そうしたものを活用することもできます）。一次資料を参照することが物理的に困難な場合は、信頼のおける二次的な文献に頼ることも可能です。ただし、どちらの場合も、参照する資料が一次資料の取り扱いに関して、しっかりと**典拠を明示しているかどうか**を必ず確認することが重要です。書かれてある内容に対して典拠が明示されていない場合は、その内容をそのまま鵜呑みにすることは避け、必ず別の文献の記述と比較して、その内容を精査する必要があります。

3. 学術的な信頼性

先ほど二次資料の活用に関して、信頼性の問題に言及しました。文献を活用する上で、重要となるのが、果たしてそれが**学術的に信頼のおけるもの**であるかどうかという問題です。例えば、13頁の表に挙げた文献のうち、論文執筆において参照するものとしてふさわしいのは、基本的に **学術的** の範疇に入るものでしょう。それ以外は、学術的なものとは言いがたく、したがって研究において参照するにはふさわしいものではありません。学術的であるというのは、**厳密かつ専門的に記述された内容をもつ**ということです。したがって、エッセイのような個人的な意見をまとめたものや、また解説や啓蒙を目的とした簡易なもの、また新聞や一般の音楽雑誌、CD や演奏会の解説といった一過的な性格の強いものは、研究において参照する文献としては基本的に用いるべきではありません。

上記の中で難しいのは、単行本の内容をどう判断するかでしょう。単行本を判断する時のひとつの目安となるのは、きちんと注がつけられているか、また参考文献表が備わっているか、という点です。学術的な信頼性は、書かれた内容に対して、注や参考文献のかたちでしっかりと**典拠が明示されること**によって保証されています。こうした情報がない文献は、書かれてある内容が信頼のおけるものか、またきちんと先行研究に則ったものであるかどうかを判断することができないため、そのまま参照するのは好ましくありません。どうしても参照したい場合には、別の文献と比較して裏付けをとるなど、十分な注意が必要です。

学術論文は、それが掲載されている媒体の種別により、学会誌論文、紀要論文、論文集所収の論文の三種類に分けることができます。この三つは掲載される媒体によって性格を若干異にしま

3. 資料の活用法

す。学会誌論文は、同じ研究分野の研究者による「査読」(ピア・レビュー)を経て掲載されているため、学術的な信頼性の最も高いものです。一方、紀要論文の場合は、そうした査読を経ないことが多いため、質的に玉石混淆である場合が少なからずあります。論文集に関しては、査読は行われない場合が多いですが、その分野の専門家による委員会やグループによって編纂されていることが多いため、内容的な信頼度は高いと言えます。

4. 必要とする研究資料にどうたどり着くか

文献探索とは、ある種の出会いです。図書館の書棚を散策していて、何気なく、偶然、手にとった書物に、長い間、疑問に思っていた事柄に対する答えやヒントが書かれていたり、その内容が研究全体に決定的な影響を与えたりすることがあるかもしれません。したがって、日常的に大学図書館を利用し、閲覧室や書庫の中にどのような文献が並んでいるかを体感的に把握しておくことは大事です。

そういう意味では、文献探索に一定の方式があるわけではありません。しかし、それでも、研究を進めていく上では、できるかぎり能率的に自分の必要とする文献にたどり着くことが必要です。そのためには上に説明したような資料や文献の種別やそれぞれの性格をよく把握しておくと同時に、文献探索の手順についても基本的なやりかたを押さえておくとう便利でしょう。

1) 音楽事典を活用する

これまでの研究史や研究状況を把握し、過去の代表的な先行研究にどのようなものがあるかを知るには、事典の参考文献表を見るのが一番です。西洋音楽の研究においては、*New Grove Dictionary of Music and Musician* (日本語版：『ニューグロヴ世界音楽大事典』)と、ドイツ語の事典 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart* (MGG) がこうした参考文献表を備えた総合事典の代表的なものです。いずれも最新版はオンラインで読むことができます。研究を始めるにあたっては、まずはこうした音楽事典の参考文献表を参照して、先行研究の全体像を把握しておくといいでしょう。

2) データベースを活用する

最新の研究、とりわけ学術論文を探すには、オンライン文献データベースが適しています。わたしたちが論文を執筆する際によく用いる代表的なオンライン文献データベースには、CiNii Research と RILM があります。

CiNii Research (URL : <https://cir.nii.ac.jp/>) は、日本で刊行されている学会誌・大学紀要などの学術論文や博士論文の情報を検索することができるオンライン・データベースで、利用登録なしに使用することができます。対して、RILM (*Répertoire International de Littérature Musicale*) は音楽文献に特化した国際的なデータベースで、学内限定アクセスとなっています(リモートアクセスも申請すれば利用できます)。どちらも著者名やキーワードから学術論文を検索することが可

能で、検索された論文がどういった内容のものかは、検索結果に掲載されているキーワードや要旨から判断できます。また、近年は、論文の本文がテキスト・ファイルや PDF のかたちでデータベースから直接ダウンロードできるものも多くなっています。

3) 文献は芋づる式に見つかる。だが……

音楽事典やデータベースを活用する以外に、個々の文献に記載された注や参考文献表も、文献探索の重要なツールのひとつです。先行研究を読むということは、ただ単に学説や知識を仕入れるためだけに行うのではなく、その文献の注や参考文献表から「芋づる式」に新しい文献を発見するプロセスでもあります。

しかし、また、ある時点で、文献探索をやめる勇気をもつことも重要です。文献探索にはきりがありません。興味深い論文が次々と見つかり、読みこなせないままに、気がつくともちの周りが論文のコピーの山になっているというのはよくあることです。先行研究はたくさん読めば読むほどいいというものではありません。もちろん、できるかぎり研究状況を把握しておくことは大切ですが、論文はかぎられた時間で執筆するものでもあります。また、他者の文献を読みすぎてしまったために、本来の自分の観点やテーマを見失ってしまう恐れもあるでしょう。研究がある程度の段階に入れば、きっぱりと文献探索はやめて、それまで蓄積した材料をいかに活用していくかということに切り替えるほうが賢明です。

5. 資料に関する情報を整理する

このようにして集めた文献については、その都度、書誌情報を整理しておくことが重要です。これは参考文献表の作成の際に必要ですし、文献を参照したり、引用したり、注をつけたりする際にいちいち必要となる情報です。こうした情報がきちんと整理されていれば、論文の執筆もスムーズに進めていくことができるでしょう。

4. 論文の構成

ここでは、学位論文の構成の仕方について見ていきましょう。「構成」といっても、論文の形式（体裁）に関わることと、文章の組み立てに関わることに大別できます。

1. 論文の形式

普通の単行本を見ると、表紙があり目次があり、という「本の形式」に沿って作られていることがわかります。学位論文を完成させるためには、論文の内容だけを書けばよいわけではなく、「学位論文の形式」に付随するいろいろな要素も整えていく必要があります。それでは具体的には、学位論文はどのような要素で構成されているのでしょうか。

1) 要旨

博士論文の教務係提出稿では、要旨の提出が義務づけられている。要旨は広く公開されるものであるため、誰が読んでも理解できるよう、わかりやすく書くこと。字数制限があるので、書き始める前に確認しておくこと。

2) 扉

タイトル（副題も含む正式のもの）、著者名を大きめの文字で書く。専攻、博音〇〇号（博士学位取得後の最終稿製本の場合）なども入れてよい。

3) 論文冒頭部分

(1) 前書き

謝辞をこの部分に置いてもよい（この部分ではなく、後書きの位置に置いてもよい）。謝辞以外に、研究に至るまでのいきさつ等でぜひ書いておきたいことがあればここに書く。ただし、研究内容と直接関係があるものは序論など論文本体に含めるべきなので、前書きは必要ないことが多い。

(2) 目次

論文本体だけでなく、論文冒頭部分や論文巻末部分も目次に入れる。別冊の付録資料がある場合、別冊も目次に入れるか、付録の存在のみがわかるようにして別冊は目次に入れないかはケースバイケース。

なお、論文冒頭部分（場合によっては論文巻末部分）には別の系統のページ数付けをすることもある（例えば論文冒頭部分のページ数を i, ii, iii, … 論文本体のページ数を 1, 2, 3, … 論文巻末部分のページ数を (1), (2), (3), … とする等）。その場合は、目次を作る時に系統の違いがわかるようにする。

(3) 凡例

目次の前に置いてよい。論文の中で使う表記について、説明が必要な場合はここに書いておく。例えば、論文中しばしば出てくる参考文献について毎回フルタイトルを書くと煩雑になるので略称で呼びたい場合、音名の表記法でオクターヴの違いの表現法を確認しておきたい場合、分析等で使う特殊な記号の意味について本文を読み返さなくても確認できるようにしたい場合等。

4) 論文本体

論文本体の構成は、序論、第一章、第二章、…、結論とすることが多い。内容が大きくいくつかの部分に分かれる場合は、複数の章をまとめて第一部、第二部などとすることもある。各章は、普通、第一節、第二節、…に分ける。必要があれば、節をさらに細かく第一項、第二項、…等に分けてもよい。

5) 論文巻末部分

(1) 参考文献表

論文で引用した文献は必ずここに書き出しておく。引用はしていないが参考にしたものについてはケースバイケース。一般的な情報を得るために読んだ文献は必要ないが、内容の理解に必要なと思われるものは入れること。

文献だけでなく、楽譜、音源や映像（CD、DVD 等）、ウェブサイト等についても同様にする。

一般的には、外国語文献、日本語文献、楽譜、録音録画、ウェブサイト等参考資料の種類ごとに分ける。それぞれの種類について、著者名のアルファベット順（日本語のものについてはあいうえお順）に並べる。

(2) 謝辞

博士論文では、必須ではないが、謝辞を含めることがある。謝辞の対象は、指導教員など論文執筆に関する直接の指導者や学位審査の審査員の他、研究の過程で援助してもらった個人や施設があればそれも含める（例えば研究資金の助成を受けた場合の助成団体、入手しにくい研究資料を使った場合の入手先、執筆途中の原稿を読んでアドバイスをくれた人物等）。演奏面のみでの指導者も含めてよい。それ以外の様々なサポートについても、特に重要なものがあれば入れてよい。

謝辞は、この部分ではなく、前書きの位置に置いてよい。

4. 論文の構成

(3) 後書き

謝辞以外に、研究を終えての感想等、論文の内容以外でどうしても書いておきたいことがあれば「後書き」としてここに入れる。

(4) 付録資料

内容的、あるいは分量的に本文の中に入れない方がよいと思われる資料については、まとめて巻末に載せておく。分量が多ければ別冊にしてもよい。

例えば、分析結果や分析に使った生データ、譜例、写真や図表、歌詞やその対訳等が考えられる。自分が作成したもの以外を載せる場合は、著作権の侵害にならないよう注意すること。

以上、標準的と思われる「学位論文の形式」を示しました。しかし、これはあくまでも参考であり、ここにあげた全ての要素をそろえなければいけないという訳ではありません。論文の性格によっては凡例が必要ない場合もあるでしょうし、謝辞は大げさなので入れたくないと考える人もいるでしょう。また、要素を並べる順番もこの通りにする必要はありません。迷う場合には、過去の学位論文を参考にするのがよいでしょう。できれば何冊か（読まなくてもよいので）閲覧して、自分の修士・博士論文に必要な要素についてのイメージを持つようにすることをお勧めします。

2. 文章の構成

学術論文の文章を構成する際には、小説や楽曲解説の文章とは少し違うところに注意する必要があります。全体的なところから細かい方へ順に見ていきましょう。

1) 論文全体の結論は？

論文全体として結局何が言いたいのか、明確になっているだろうか。もちろん音楽の問題は微妙で、一言で言えるような結論が出せない場合も多いだろう。しかし「この問題はこのように複雑なので、単純化してはいけない」という主張も立派な結論である。最終的な結論に向かうように論文全体が構成されていると、非常に読みやすくなる。

2) 章立ての決め方

通常は「研究の前提」→「実際に研究した内容」→「そこから何が言えるか」の順とすることが多い。「研究の前提」とは、自分がその問題を重要だと考えるようになった理由や、先行研究の状況等である。最終的に何を言いたいかについては論文冒頭で予告することが多いが、最後まで読んで初めてわかるという推理小説のようなやり方も可能である。

3) 各段落の構成

基本的には「一つの段落では一つのことだけを主張する」と考えるとよい。一つの段落がとても短い時（一文だけの段落は短すぎることが多い）には、関連することを主張している他の段落と一緒にできるかもしれない。逆に一つの段落がとても長い時（数ページにわたる段落は読みづらいことが多い）には、複数の主張が盛り込まれているのではないかと考える必要がある。

文章を見直す際には、一文ずつ見るだけでなく、全体の流れも見てみよう。いくつかの段落を並べる順序を変えるだけで文章がすっきりすることが多い。例えば、読者が「なぜ？」と質問したくなるようなことを主張していたら、その理由を説明する段落を近くに置く方がよいだろう。また、ほとんど同じ内容を別の個所で繰り返していたりしないだろうか。強調や整理のために繰り返すことは大切だが、意味のない繰り返しは避けたい。話題が飛躍してしまっている時には、その段落を別の節や章に持っていくことができないか考えてみよう。

4) 論理的な文章を書くための注意

(1) 現在書いていることが、次のうちどれなのかがはっきりわかるように書く。「事実を述べたもの」「自分の感じたこと」「誰かが言ったこと」「それまでに書いた内容から導き出されること」等である。

(2) いくつかの項目を列挙する場合には、各項目の性格をそろえるとよい。性格が違うように見える項目でも、論文のその個所で言いたいことに合わせて加工することにより、合わせることは可能である。例えば「曲想の表現にはこの指使いがよい」と「この曲の出版譜には間違いが多い」ことは性格が異なるのでそのまま並べることはできない。しかし、特定の曲の演奏のために準備すべきこととして「出版譜に間違いがないか確認すること」と「どのような指使いがよいか決めておくこと」を並べることはできる。

(3) 個々の文について、「主語と述語が対応しているか」「文の途中でいつのまにか主語が変わったりしていないか」を意識する。また、文と文をつなぐための接続詞やそれに相当する語句が適切に使われているか注意する。

自分の書いた文章の問題点には気づきにくいものです。途中まで書いた段階で、原稿を誰かに読んでもらう機会を積極的に作るようにしましょう。家族や友人等でも構いません。内容に関して判断できる専門的知識はなくても、誤字脱字や文章のわかりにくい点を指摘してもらえれば修士・博士論文のレベルアップにつながります。

5. 参考文献のまとめ方

「巨人の肩の上に立つ」という言葉にあらわれているように、私たちは先人の残してきたものとまったく無関係に自身の研究を進めていくことはできません。どのような資料や先行研究をどう活用しながら自分の論を展開しているのか、論文末の参考文献表は、その研究が拠って立つ位置を明瞭に映し出す、とても重要なものです。そして、後から検証することができるよう、情報を誰にでもわかりやすくまとめることが求められます。

1. 資料を分類する

それぞれの研究対象や研究方法によって、必要とされる資料は様々な形態をとっています。文献表をまとめるにあたっては、こうした形態によって、資料を整理、分類する必要があります。先行研究には、雑誌論文、単行本、学位論文、事典項目など様々な形を取るものが含まれますし、特に音楽を対象とした論文では、楽譜や音響資料、映像資料も重要となることが少なくないでしょう。これらをすべて一緒にしてしまうと文献表としては要領を得ないものになってしまいますし、細かく分類しすぎても繁雑で読みにくいものになってきます。どのように分類するのか、絶対的な基準を決めることはできませんが、大きく「文字情報」「楽譜情報」「視聴覚情報」のように分けることができるでしょう。また、インターネット上の情報を利用する場合には、こうした分類にあてはめられないこともあります。その場合には「オンライン情報」をひとつのまとまりとして整理することも考えられます。

2. 資料を順序よく並べる

分類した様々な資料は、誰もが容易に資料にアクセスできるように決まった順序で配列する必要があります。多くの場合、資料の著者の名前（姓）に準じて五十音順、もしくはアルファベット順に並べるのが一般的です。このため、参考文献表では、著者の名前を「姓、名」の順に書き記すようにします。また、著者名が順序を決める基準となることが多いため、日本語の文献（五十音順に配列することが多い）と、欧文の文献（アルファベット順に配列するのが基本）とを大きくわけてまとめるとわかりやすいようです。

3. 資料の情報を的確に記述する

それぞれの資料については、基本的に「誰が」「何を」「どこで」「いつ」の四点を踏まえて整理していくことができます。文献の執筆者名（誰が）、書名や論文名（何を）、出版地や出版社（どこで）、出版年（いつ）といった情報をもれなく押さえていくことで、後からその文献に簡単にたどり着くことができます。もちろん、資料の中には様々な形をとるものがあり、必ずしもこれらの情報すべてが揃わない場合（たとえば、執筆者名がわからない事典の項目や新聞・雑誌記事など）もあれば、プラスアルファの情報が必要な場合（論文集所載の一論文を取り上げるなら、論文の題名、執筆者名だけではなく、論文集そのもののタイトルや編者についての情報）も考えられます。

参考文献についての諸情報を厳密にどのように記していくのか、筆記のスタイルにはいくつかのタイプがあり、研究の分野によって多用される書式には差が見られることもあります。どのスタイルで情報を書き記すのかは、研究対象、研究方法、集められた資料の種類によって適切なものを選択する必要がありますが、いずれにしても論文の中で用いるスタイルはひとつに統一することが重要です。詳細は東京藝術大学音楽学部で配布している『論文作成の手引き』を参考にしてください。

6. 博士論文作成計画の立て方

※本章は、博士論文を念頭に記述されていますが、
修士論文の執筆にあてはまることも多く書かれています。
適宜参考にしてください。

研究のテーマや内容がほぼ決まったら、研究計画を立ててみましょう。作曲や演奏などの音楽活動と論文を書くという作業を両立させるのは、決して容易なことではありません。しかし、最初からきちんと計画を立て、早めに準備を始めれば、音楽活動に支障をきたすことなく、時間的にも精神的にも余裕を持って論文に取り組むことができます。では、入学から三年で論文を完成させるためには、いつ頃までに何をすればよいのか、またどのように計画を立てればよいのか、順を追って見ていきましょう。

1. 計画を立てるまえに

重要なのは、音楽家としての今後のスケジュールを確認してから、論文作成の計画を立てることです。学位審査演奏会や学位審査作品の準備だけでなく、演奏会のリハーサルと本番の日程、作曲の締切日、コンクール、オーディション、海外渡航、留学の予定などを確認してみましょう。すると、論文作成にどれだけの時間を割くことができるのかが明確になります。つまり、**具体的な論文作成計画を立てるためには、作曲や演奏を含む三年間のあらゆる活動を考慮に入れる必要がある**のです。

そこで、三年間の予定を一度に見渡せる研究計画表を作成してみたいかどうか（次ページの表を参照）。まず、「学位審査演奏会／作品」欄に、博士特別研究（博士リサイタルまたは作品発表）の予定と学位審査演奏会や学位審査作品の準備計画を記入します。次に、「学事暦」欄に指導教員会議の日程を、「音楽活動」欄に演奏会やコンクールの日程などを書きます。最後に「論文作成計画」欄に、論文の研究計画を書き込んでいきます。

2. 論文提出までの流れ

論文を完成させるまでの間には、本文の執筆だけでなく、資料や情報の収集、先行研究の精査、研究の対象と方法の検討、章立ての構想、参考文献表・譜例・図表等の作成、文章の推敲と校正など、さまざまな作業行程があります。テーマや研究方法により異なりますが、基本的には次ページのような過程を経て、論文が完成します。

6. 博士論文作成計画の立て方

表. 論文提出までの大まかな流れ(10月提出の場合)

年次	月	学事暦	学位審査演奏会/作品	音楽活動	論文作成計画例
1	4	指導教員会議(1) 研究計画書提出	演奏曲目/作品の構想		論文の仮題目を設定する
	5	↑ 指導教員会議(2) ↓	↑ 博士リサイタル または作品発表 ↓		研究準備 資料や情報を探索・収集する 先行研究を精査する 参考文献表を作成する 研究対象をしぼり込む 研究方法を検討する 研究概要を書く
	6				
	7				
	8				
	9				
	10				
	11				
	12				
	1				
	2				
	3	進捗状況報告書提出			研究調査 分析、解読、観察、記録、実験等
2	4	指導教員会議(1) 研究計画書提出	演奏曲目/作品の決定		章立ての構想を練る
	5	↑ 指導教員会議(2) ↓	↑ 博士リサイタル または作品発表 ↓		研究ノートやメモを作成し 研究内容を言語化する
	6				
	7				
	8				
	9				
	10				
	11				
	12				
	1				
	2				
	3	進捗状況報告書提出			論文執筆 研究成果を文章にする
3	4	指導教員会議 学位予備申請提出	学位審査会の準備		論文題目を決める
	5				↓ 仮完成 文章を推敲する 校正、印刷
	6				
	7				
	8				
	9				
	10				学位本申請論文等提出
	11				
	12				
	1	学位審査試験 (口述試問)	学位審査作品提出 学位審査演奏会		
	2				
	3	学位授与			論文データ提出(学位取得後3ヶ月以内)

6. 博士論文作成計画の立て方

一年次の前期は、研究の準備を行います。論文の仮題目を決め、それに基づいて資料や情報を探索・収集し、先行研究を精査していきます。その過程で指導教員の先生方と相談しながら、自分の研究がどのような点で新しく独創的であると言えるのか、アイデアを整理し、研究対象と研究方法をしぼり込んでいきます。一年次後期から、論文の核となる研究調査を始めます。提出の一年前にあたる二年次の十月頃から、本格的な論文執筆を開始するのが理想的です。この時期から約50週かけて論文を執筆することになります。三年次は、研究内容をさらに深めつつ論文の形を整え、推敲を重ねて仕上げていきます。

3. 論文作成計画の例

1) 研究の準備段階

研究テーマは入学後すぐに決めます。研究テーマと三年間の研究計画を記した「研究計画書」を教務係に提出する必要があるからです。それまでに主任指導教員と相談のうえ、論文の仮題目を決めましょう。正式な論文題目は、論文を提出する三年次の初めまでに決めれば大丈夫です。この時期に、学位予備申請書類に正式な論文題目を記入して教務係に提出します。

研究テーマが決まったら、資料や情報の探索と収集を行い、先行研究を精査します。研究の視点や方法にもよりますが、自分の研究テーマに関連する資料や情報がどれだけあるのかをなるべく早く把握する必要があります。それにより、研究の糸口がみつかったり、焦点が定まったり、自分の研究に独創性や新規性があるかどうかを見極めることができるからです。なるべく早く作業を開始し、一度だけでなく、数回に分けて根気よく続けることが大切です。ある程度まで探索を行ったら、入手可能かどうか調べてみましょう。ようやく見つけた文献や楽譜などの資料が本学附属図書館にない場合には、他大学や海外から取り寄せることになります。その際、手元に届くまでに数週間から数ヶ月かかる場合がありますので、一年次の前期から探索と収集を始めましょう。

研究テーマに深く関わる情報や文献を入手したら、夏休みなどを利用してじっくり腰を据えて読みましょう。ここで得られたさまざまな知識やアイデアが、作曲や演奏における体験とリンクした時に、身体が記憶している感覚や漠然としたイメージが独自の知見（自分の考えや発見、意見、主張）となって焦点をむすび、研究対象や研究方法をしぼり込むのに役立つでしょう。この段階で考えていることを忘れないうちに言語化し、研究概要としてまとめておくことをお勧めします。また、参考文献表も作成しておきましょう。

2) 研究調査

研究調査の内容や方法は多岐にわたります。各自の研究テーマに応じて、作品分析、史料の解読、フィールドワーク、観察、実験等を行い、記録をとります。このとき、研究ノートや研究カード、ビデオやICレコーダーなどを活用し、調査内容を記録していきます。忘れてはならないのは、博士リサイタルや作品発表の内容も、重要な研究成果であるということです。そこで挑戦し

たことを言語化すれば、立派な研究の一部になります。研究調査と並行して論文の構成（章立て）を考え、目次を作成します。

3) 論文執筆

いよいよ研究成果を文章にまとめます。書けるところから本文（序論、本論、結論）を書き始めましょう。演奏活動が忙しい時期は、隙間の時間を利用して、何も考えずにできるような単純作業をすることをお勧めします。たとえば、譜例のスキャン、表の作成など、文章以外の部分を少しずつでも進めておくと、時間を有効に使うことができます。

本文をある程度書き上げたら、パソコンを閉じて論文から離れましょう。自分の考えや言葉を熟成させるためには、冷却期間が必要です。冷静かつ批判的に読み返すためにも、一度机を離れ、論文を寝かせましょう。論文のことを忘れて、好きなことを思う存分楽しみ、気分転換をするとよいでしょう。

十分に休養がとれたら、いよいよラストスパートです。論文全体を読み返し、文章の内容や構成を推敲します。この段階で、できれば誰かに読んでもらい、第三者の意見を伺うとよいでしょう。誤字や脱字、論の矛盾点など、自分ではなかなか気がつかないことを指摘してもらうことができます。

4) 論文提出

提出日の一ヶ月前からは、大きな本番や仕事は入れないようにして、論文執筆に専念できる環境を意識して作るようにしましょう。とくに提出の二週間前は、なるべく予定を入れないこと。ただし、演奏をすっかりやめってしまうと生活のリズムが狂ってしまうので、普段どおりレッスンに行き、軽めの本番をこなして達成感を味わった方がよいでしょう。また毎日、十分な栄養と睡眠をとり、規則正しい生活をして体調管理に気をつけましょう。運動不足になりがちなので、疲れたら散歩をすると、良い気分転換にもなります。

自分が疲れて来ると、パソコンも疲れます。パソコンの故障に備えて、こまめにデータのバックアップをとりましょう。その際、パソコン本体以外の複数の媒体（USBメモリ、DVD-R、外付けハードディスク、Googleドライブなど）にデータを保存しておくこと安全です。また、プリンタの反応が鈍くなったり、紙詰まりを起こして動かなくなることもあるので、作業が一段落したら作成した文書を印刷する習慣をつけておくことをお勧めします。紙とインクを大量に消費するので、あらかじめ多めに購入しておくこと慌てずに済みます。論文の表紙と綴じ紐は大学生協で販売していますが、売り切れてしまうことがありますので、早めに購入しましょう。論文本体とその附録は、製本した上で、合計四部提出します（審査員が三名以上の場合は、追加提出を要請される場合があります）。完成した論文の印刷は、提出日の二～三日前から始めましょう。

教務係への提出期限は厳守する必要があります。締切時刻を過ぎると受理してもらえません。交通渋滞に巻き込まれたり、電車が遅れることもあるので、時間に余裕を持って家を出ましょう。論文本体以外の提出書類（CDやDVD、履歴書等）も忘れずに。

4. 上手な計画の立て方

例えば三年次の十月に論文を提出するためには、その一年前から本格的な論文執筆を開始するのが理想的です。つまり、二年次の十月から約 50 週かけて論文を完成させるのです。博士課程では、履修する授業数は少ないものの、実技レッスンや学内外の行事、仕事や音楽活動でかなり忙しい毎日を送ることになります。約 50 週のうち、果たしてどれだけの日数を論文執筆に費やせるか、自分のスケジュールと突き合わせて考えてみましょう。想像以上に時間がないことに気付きませんか？そこで、**意識して論文執筆のための時間を作る**必要があります。今抱えている仕事や本番が終わってから論文に取りかかろうと考えていたら、いつまでたっても論文は書けません。何もしないまま、あっという間に三年間が過ぎてしまいます。論文を完成させるためには、周到な計画を立てる必要があるのです。

ポイントは、**なるべく具体的な執筆計画を立てること**です。まず、やらなければならないことをひとつずつ書き出してみましょう。紙に書いて作業項目を可視化することで、論文執筆に費やせる時間に対してどれだけの作業をしなければならないかが明確になります。

次に、いつまでに（期限）、何を（対象）、どこまで（範囲）やるか決めていきましょう。その際、「12月末までに第一章を完成させる」というような大まかな目標を掲げると挫折します。容易に乗り越えられる小さなハードルをたくさん設けるようにすると、三日坊主にならずうまくいきます。たとえば「10月20日までに第一章第一節の初稿を書く」「次の月曜日までに第二章第二節の譜例を作成する」というように小さくて具体的な目標を設定するのです。つまり、**一〜二週間単位で達成できるような小さな目標を作ることがコツ**です。実際に行う作業をなるべく細かく具体的に決めていくのです。ただし、計画は予定通りには行かないものです。最初に立てた計画に固執せず、研究の進み具合に応じて柔軟に対応することも大切です。

5. なぜ時間がかかるのか

論文を書くという作業は、想像以上に時間がかかります。それには、大きく分けて三つの要因があります。

- ① 技術面：パソコンの入力と編集、譜例や図表の作成
- ② 表現面：文献の精読、アイデアの言語化、文章の推敲
- ③ 心理面：頭の切り替え、気力や思考力の低下

技術面では、パソコン（とくに文章作成ソフトや楽譜制作ソフトの使い方）やスキャナの操作に最も時間がかかります。論文を書きながら使い方を覚えるのでは効率が悪いので、論文を書き始める前にソフトや機材の基本操作に慣れておくといいでしょう。操作方法はバージョンによって異なります。バージョン変更時には注意しましょう。

表現面では、外国語はもちろんのこと、日本語の文献であっても、それを精読して理解し、批判的に検討を加えるためには、ある一定の時間が必要となります。また、自らの主張やアイデアを言語化するためには、自分の考えを人に話してみたり、紙に書いてみることをお勧めします。そのうえで、学術論文にふさわしい表現で文章にするためには、幾度も推敲を重ねることが大切です。

心理面としては、机に向かい論文を書くという作業は、音楽をする場合とまったく異なる脳や神経を使うので、頭の切り替えがなかなか大変です。慣れるまでは身体が固まり、ストレスが溜まり、気力や思考力が低下して、机に向かう意欲が湧かないこともあります。はじめは一日十分でもよいので机に向かい、何かを読んだり書いたり考えたりすることを日々の日課にするとよいでしょう。千里の道も一歩から。まずは、今すぐできることから始めてみましょう。

【付録】学位論文提出前の作業チェック表

記述内容について

- 序論（序章）、本文、結論がそろっているか
- 序論に論文の目的、対象、方法、意義を書いたか
- 序論で示した問い（目的）と結論で述べた答えが一致しているか
- 各章に章の目的とまとめを書いたか
- 各章の目的と各章のまとめはそれぞれ内容が一致しているか
- 文章中に曖昧な表現はないか（「～と思う」「～らしい」「～のようである」などの表現を多用、主語がなく読みづらい、一文が長すぎる、一段落が長すぎる…）
- 自分の意見と他人の意見をしっかりと区別して書いているか（引用のしかたは適切か）
- 論文題目は適切か（研究の対象、目的、方法を一目で分かりやすく示す）

書式について

- 扉、凡例、目次、文献表がそろっているか
- 余白を十分にとってあるか（表紙の縦じしろが十分であるか）
- 文字の種類（フォント）や大きさ（ポイント）は統一されているか
- 文字の大きさや行間は適切か（文字が小さい、または行間が狭く読みづらいなど）
- ページ番号は正しく挿入されているか
- 注の書式は統一されているか
- 書誌情報の書式は統一されているか
- 本文中に引用した資料すべての情報を文献表に記したか（文献、楽譜、音響・映像資料、ウェブ資料など）
- 表紙を用意したか（生協でも販売していますが、締切前は売切れとなる場合もあります）
- 楽譜や図版などについて著作権の問題を考慮したか

（参考ウェブサイト）

「東京藝術大学 音楽学部等における学術論文執筆のための著作権ガイドライン」

<https://www.geidai.ac.jp/wp-content/uploads/2017/06/a2aa8a0f4c2bd3536b565c41a1c73930.pdf>

作成：

東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター
(平成 20～24 年度)

東京藝術大学音楽学部音楽総合研究センター
(令和 4 年度、改訂版)

編集：

中村美亜

佐藤文香 (改訂版)

山岸佳愛 (改訂版)

執筆：

遠藤衣穂

中田朱美

中村美亜

平井真希子

向井大策

森田都紀

吉川文

芸術実践領域（実技系）学位論文作成マニュアル

発行者：東京藝術大学大学院音楽研究科

発行日：2013 年 3 月 31 日

改訂版発行日：2023 年 3 月 31 日

©2013 東京芸術大学

※ 無断転載・複写・引用を禁じます。

使用の際には、必ず許可をとってください。

問合せ：東京藝術大学音楽学部教務係

〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8